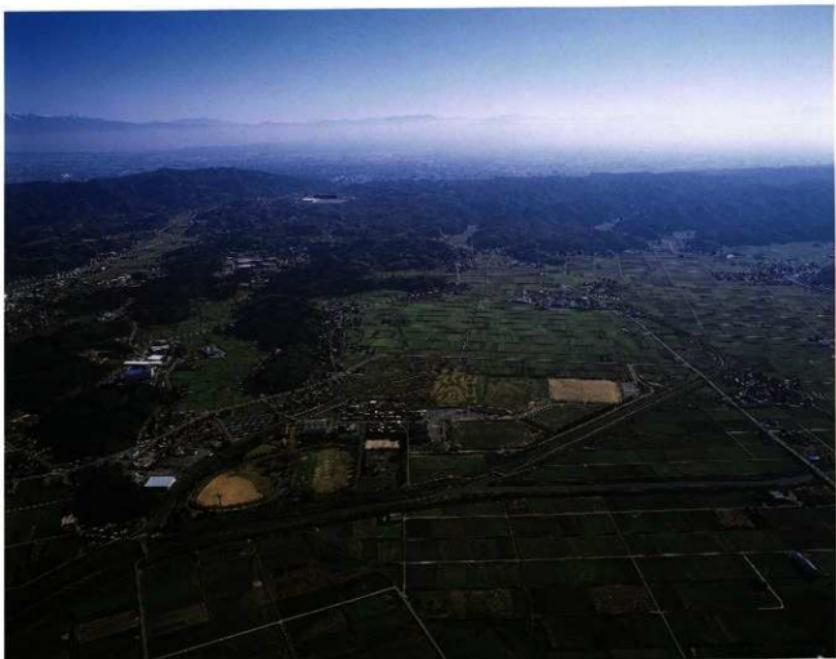


大浦地区農業生産法人等育成緊急整備事業に伴う
試掘調査概要

大 浦 遺 跡
堀田サカイ遺跡
大浦クラノマチ遺跡
大浦ウマダ遺跡

2009年3月

氷見市教育委員会



卷頭図版1 調査区遠景（北から）



卷頭図版2 調査区遠景（南から）

大浦地区農業生産法人等育成緊急整備事業に伴う
試掘調査概要

大 浦 遺 跡
堀田サカイ遺跡
大浦クラノマチ遺跡
大浦ウマダ遺跡

2009年3月

水見市教育委員会

序

東に富山湾を隔てた靈峰立山を仰ぐ氷見市は、古くから海の幸、山の幸に恵まれ、人々の生活の場として、数多くの文化遺産を生み育んできました。

氷見市大浦は、大正3年までは耳浦と呼ばれ、南北朝時代の文献にもその名が見える地域です。また万葉集に詠われた垂姫の崎、垂姫の浦は大浦近辺のことではなかったかといわれています。

これまで、大浦地区では丘陵頂部から丘陵縁辺に立地する遺跡の存在を確認しているのみで、平野部の大部分はかつての布勢水海の名残と考えられています。ところが農業生産法人等育成緊急整備事業に先立ち、あらためて大浦地区的分布調査を実施したところ、これまで遺跡が確認されていなかった平野部の広い範囲で土器類が採集され、未知の遺跡が存在する可能性が高まりました。そのため、この分布調査の成果を受けて、大浦地区の広い範囲を対象とする試掘調査を実施することになりました。

今回の試掘調査では、すでにその存在が把握されていた丘陵縁辺に立地する大浦遺跡・堀田サカイ遺跡に加え、平野部で大浦クラノマチ遺跡・大浦ウマダ遺跡の2遺跡が新たに確認されました。それぞれ古代と中世を主体とする遺跡であり、この地域の歴史を知るうえで貴重な成果となりました。今後、事業計画の設計が進められていくなかで、これらの遺跡を適切に保護していくことに努めたいと考えています。

今回の試掘調査にあたりましては、富山県高岡農林振興センターおよび大浦地区の関係者の皆様に多大なるご協力をいただきました。この場を借りまして、厚くお礼申し上げます。

平成21年3月

氷見市教育委員会

教育長 前辻 秋男

例　　言

- 1 本書は、平成20年度に実施した富山県氷見市大浦地内に所在する埋蔵文化財所在推定地の試掘調査報告書である。
- 2 調査は、農業生産法人等育成緊急整備事業（大浦地区）に先立ち、富山県高岡農林振興センターの依頼を受けて、氷見市教育委員会が実施した。
- 3 調査費用は、国庫補助金・県費補助金の交付を受けた。
- 4 調査対象面積は約70ha、発掘調査面積は約561m²である。
- 5 調査期間は、平成20年11月4日より平成20年12月3日（実働14日）である。
- 6 調査事務局は、氷見市教育委員会生涯学習課に置き、副主幹鈴木瑞應・大野究、学芸員廣瀬直樹が調査事務を担当し、課長廣瀬昌人が総括した。
- 7 調査および本書の執筆・編集は、大野の協力を受け、廣瀬直樹が担当した。また遺物の実測・トレースは廣瀬が中心となり、後述する整理作業員が行った。
- 8 空中写真の撮影は、株式会社エイ・テックに委託した。
- 9 出土遺物と調査に関わる資料は、氷見市教育委員会生涯学習課が保管している。
- 10 遺跡の略号は以下のとおりとした。また遺跡外からの出土遺物には「大ウラ」と注記した。
大浦遺跡：OU 堀田サカイ遺跡：HOS 大浦クラノマチ遺跡：OUKM
大浦ウマダ遺跡：OUUM
- 11 調査参加者は次のとおりである。

発掘作業員：姿 忠男・瀬戸国雄・谷山 馨・中嶋重信・中西正一・中村俊雄・林 啓三・
藤井久征・丸山国男・村下 弘・山下 異（以上、氷見市シルバー人材センター）
整理作業員：三矢恵京・日南 静

- 12 調査・本書作成にあたり、下記の方々・機関から多大なご教示・ご協力を得た。記して感謝申し上げる。

富山県高岡農林振興センター・富山県教育委員会生涯学習・文化財室・富山県埋蔵文化財センター・氷見市立博物館・大浦地区・水口工業株式会社・奥田直文・小堀卓治（氷見市立博物館館長）・柳 銑次（大浦地区自治振興委員）

目 次

第1章：遺跡の環境.....	1
第1節：地理的環境.....	1
第2節：歴史的環境.....	1
第2章：調査の概要.....	4
第1節：調査に至る経緯.....	4
第2節：調査の経過.....	4
第3章：調査の成果.....	6
第1節：分布調査の成果.....	6
第2節：試掘調査の方法.....	7
第3節：試掘調査の成果.....	8
(1) 大浦遺跡	8
(2) 堀田サカイ遺跡	9
(3) 埋蔵文化財所在推定地	10
第4節：出土遺物.....	12
(1) 大浦遺跡	12
(2) 堀田サカイ遺跡	12
(3) 大浦クラノマチ遺跡	12
(4) 大浦ウマダ遺跡	13
(5) 埋蔵文化財所在推定地	13
第4章：まとめ.....	18
引用・参考文献.....	19
報告書抄録.....	29

表 目 次

第1表 大浦遺跡 基本層序.....	8	第3表 大浦クラノマチ遺跡 基本層序.....	11
第2表 堀田サカイ遺跡 基本層序.....	9	第4表 大浦ウマダ遺跡 基本層序.....	11

挿 図 目 次

第1図 周辺の遺跡.....	3	第7図 遺物実測図(1)	14
第2図 農業生産法人等育成緊急整備事業 (大浦地区) 計画平面図	5	第8図 遺物実測図(2)	15
第3図 調査区位置図.....	7	第9図 遺物実測図(3)	16
第4図 大浦遺跡試掘調査概要図.....	8	第10図 遺物実測図(4)	17
第5図 堀田サカイ遺跡試掘調査概要図.....	9	第11図 十二町潟湖水線変遷図.....	19
第6図 大浦クラノマチ・大浦ウマダ遺跡 試掘調査概要図.....	11		

写 真 図 版 目 次

卷頭図版 1	調査区遠景（北から）		3. 大浦クラノマチ遺跡遺構検出状況
卷頭図版 2	調査区遠景（南から）		4. 大浦クラノマチ遺跡遺構検出状況
図版 1	遺跡周辺空中写真 昭和22年（1947）米軍撮影		5. 大浦クラノマチ遺跡遺構検出状況
図版 2	遺跡周辺空中写真 昭和38年（1963）撮影		6. 大浦クラノマチ遺跡遺物出土状況
図版 3	1. 東地区遠景（北から） 2. 西地区遠景（北から）	図版 6	7. 大浦ウマダ遺跡遺物出土状況
図版 4	1. 大浦遺跡トレンチ掘削状況 2. 大浦遺跡土層断面 3. 大浦遺跡土層断面 4. 大浦遺跡土層断面 5. 堀田サカイ遺跡トレンチ掘削状況 6. 堀田サカイ遺跡トレンチ掘削状況 7. 堀田サカイ遺跡遺構検出状況 8. 堀田サカイ遺跡遺構検出状況		8. 大浦ウマダ遺跡遺物出土状況
図版 5	1. 大浦クラノマチ遺跡遺構検出状況 2. 大浦クラノマチ遺跡遺構検出状況	図版 7 図版 8 図版 9	1. 大浦ウマダ遺跡炭化物層検出状況 2. 大浦ウマダ遺跡土層断面 3. 大浦ウマダ遺跡土層断面 4. 大浦ウマダ遺跡土層断面 5. 作業風景 6. 作業風景 7. 作業風景 8. 作業風景 遺物写真（1） 遺物写真（2） 遺物写真（3）

第1章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

氷見市は、富山県の西北部に位置し、能登半島の基部東側にあたる。昭和27年の市制施行から昭和29年までに旧太田村を除く氷見郡1町17村が合併し、現在の氷見市が成立した。面積は約230km²、人口は約5万4千人である。

市域は、北・西・南の三方が標高300~500mの丘陵に取り囲まれ、これら丘陵から派生する小丘陵により、西条・十三谷・上庄谷・八代谷・余川谷・瀬浦の6つの区域に分けられる。また市の東側は、約20kmの海岸線をもって富山湾に面している。

調査対象である大浦は、仏生寺川流域に広がる十三谷地区に所在する。仏生寺川の下流にはかつて布勢水海と呼ばれた湯湖が広がっており、現在は十二町潟にその名残を留める。仏生寺川には支流が多く、これら支流はかつて直接・間接に布勢水海に注いでいた。大浦の南方には二上山塊が位置しており、そこから派生した低い丘陵が東方に連なる。西および北方は十二町潟周辺の広大な水田地帯が続く。過去に区画整理が実施されており、整然とした水田が広がる。現在の集落は丘陵縁辺部に密集している。

調査対象地は中央に丘陵を挟んで東西2地区に分かれる。東地区は東西を丘陵に挟まれた谷部で、西地区は神代川右岸に広がる水田地帯である。

第2節 歴史的環境（第1図）

大浦は、もとは神代村大字「耳浦」と称していたが、大正3年に大浦に改称された。これは人体名の村名は聞えが悪いことが理由だといい、同地に大浦の地名があったので村名も大浦にしたとされる（児島1962・十三地区郷土文化再発見活動実行委員会1993・氷見市2000）。

さて、大伴家持が越中国守として越中国に在任した天平18年（746）から天平勝宝3年（751）の5年間に、布勢水海に舟を浮かべて遊覧した際に詠まれた歌が『万葉集』に複数残されている。それらの中に見える「乎布の崎」・「乎布の浦」という地名は、布勢水海南岸の圍から大浦にかけて二上山塊の連なりが北側に突出した丘陵のあたりと推定されている。また同じく「垂姫の崎」・「垂姫の浦」は「乎布の崎」一帯、ないし圍の丘陵地西麓である耳浦村（大浦）付近に比定されている。なお『万葉集』には、布勢水海が射水郡旧江村にあると記されている。『倭名類聚抄』には古江郷の名があがり、布勢水海南部から東部にかけての地区、神代・宮田地区一帯の地と推測されている。古江郷をはじめ、布勢水海北部から西部にかけての布西郷など各郷の成立は奈良時代にさかのぼると考えられる（氷見市1998・2006）。

耳浦は南北朝期の文献にその名が見える莊名もある。耳浦庄は布勢水海の南岸一帯の地で、現在の大浦地区を中心として、東は庄、西は懇領までの地域に比定されている。至徳2年（1385）の足利義満御判御教書案（『飯尾文書』）によると、越中国耳浦庄内懇領分地頭職はもともと耳浦又五郎入道の所領であったが、小杉村（現、氷見市小杉）などとともに幕府奉行人飯尾道勝から子息の兼行に譲与され、それが將軍足利義満によって安堵されている。耳浦庄という莊名はこの文書が初見であり、その成立等については不明である。また耳浦又五郎入道についての史料的所見はこれだけであり、耳浦庄を本貫とする在地武士で、親応の擾乱前後までに守護であった井上俊清（曉悟）か、あるいは桃井直常の反幕府行動に与同して滅亡し、その所領の耳浦庄内懇領分地頭職も没収された、と考えられている（氷見市1998）。なお大浦の小字「館ノ下」を、耳浦又五郎入道の居館の跡を示す地名と考える説がある（児島1962）。

次に大浦周辺の遺跡について概観してみたい（氷見市2002・氷見市博2005）。大浦はかつての布勢水海南岸に位置し、近辺の遺跡は、その大部分が丘陵上ないし丘陵の縁辺部に立地している。

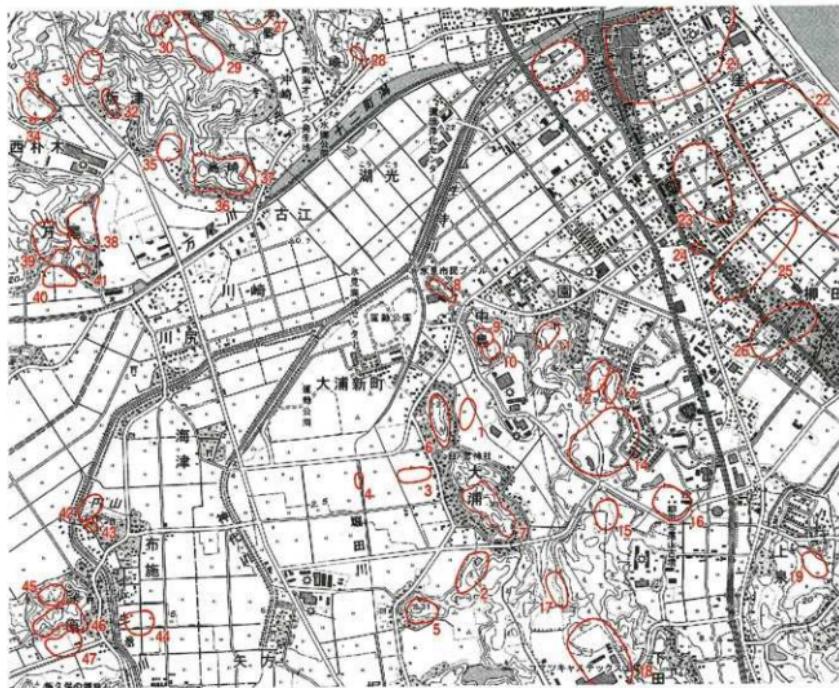
縄文時代前期の縄文海進時には平野部のほとんどが海であったが、縄文時代中期初め頃の海退によって布勢水海が形成された。その頃には丘陵縁辺部や砂丘地帯、台地上に集落が分布するとみられる。大浦の南方台地に立地する四十塚遺跡では、縄文時代中期中葉から晩期中葉までの遺物が出土している。また大浦三乘寺遺跡では縄文時代の石器が1点採集されている。

弥生時代には布勢水海周辺で稲作が導入されたと考えられる。大浦遺跡で弥生時代の扁平片刃石斧があり、馬乗山遺跡で弥生時代末から古墳時代初め頃の土器が確認されている。

古墳時代の氷見市には多数の古墳群が築かれた。古墳時代前期前半には、大浦の東方に日本海側最大の前方後方墳、柳田布尾山古墳が築造された。被葬者は富山湾を中心とした海上交易を掌握した人物と推測されている。大浦地区の丘陵にも古墳群の存在が明らかとなっており、前方後円墳ないし前方後方墳1基・方墳5基からなる大浦高山古墳群（第3章第1節にて詳述）、円墳2基からなる大浦三藏古墳群が確認されている。大浦三藏古墳群とは小さな谷を挟んだ東側の丘陵斜面には、6世紀前半に操業した須恵器窯、園カンデ窯跡が所在する。これは富山県内では最古の須恵器窯である。

古代には、大浦を含む布勢水海南岸一帯に古江郷が成立していたと考えられる。大浦近辺では、大浦深素遺跡・堀田サカイ遺跡で古代の遺物が採集されている。

中世には、この地域は耳浦庄とよばれ、南北朝期以前は耳浦氏が所領としていたと考えられる。これは前述の小字「館ノ下」とも関連するが、大浦高山古墳群の立地する丘陵にはかつて「タチの城」と呼ばれる城があったという伝承があり、古墳群の北側に平坦面を確認することができる。またこの丘陵には十三塚伝承も残り、関連は不明だが大浦諏訪遺跡では詳細不明の塚状遺構が確認されている（氷見市教委2008）。



第1図 周辺の遺跡 (S=1/25,000)

- | | | |
|------------------------|--------------------------|---------------------|
| 1 大浦遺跡（弥生・古代・中世・近世） | 17 大浦深赤遺跡（古代・近世） | 33 西朴木古墳群（古墳中～後） |
| 2 堀田サカイ遺跡（弥生・古代・中世・近世） | 18 四十塚遺跡（縄文～晩・古墳・古代） | 34 西朴木フルヤチ遺跡（中世） |
| 3 大浦クランマチ遺跡（古代・中世・近世） | 19 上泉遺跡（古墳～中世） | 35 収津 B 古墳（弥生・古墳） |
| 4 大浦ウマダ遺跡（古代・中世・近世） | 20 十二町羽根排水機場遺跡（縄文前～晩・古代） | 36 鳥崎城跡（城跡） |
| 5 馬乗山遺跡（弥生末～古墳初） | 21 鹿北遺跡（弥生・古代・中世・近世） | 37 十二町鳥崎遺跡（弥生・古墳） |
| 6 大浦跡跡遺跡（不明） | 22 松田江北遺跡（縄文・弥生・古代・中世） | 38 万尾遺跡（弥生後～近世） |
| 7 大浦高山古墳群（古墳・中世） | 23 座シムラ遺跡（縄文～近世） | 39 万尾城跡（城跡） |
| 8 大浦城跡（中世） | 24 座経原（近世） | 40 万尾 B 古墳（弥生～近世） |
| 9 大浦三畠古墳群（古墳） | 25 柳田遺跡（縄文・弥生後～古墳） | 41 万尾古墳（古墳前） |
| 10 大浦三常寺遺跡（縄文） | 26 柳田茨木遺跡（弥生・中世） | 42 布施ハト田遺跡（縄文後・古代） |
| 11 園カンゲ窓跡（古墳後） | 27 十二町赤野遺跡（古代・中世） | 43 布施円山古墳（古墳） |
| 12 関長堀遺跡（不明） | 28 十二町矢崎御穴群（飛鳥白鳳） | 44 布施若宮遺跡（古墳） |
| 13 紣田沖宮遺跡（不明） | 29 荒船 B 遺跡（縄文・中世） | 45 深原前田遺跡（古代・中世・近世） |
| 14 索田布尾山遺跡（縄文～近世） | 30 荒船ソモギ遺跡（中世） | 46 深原古墳群（古墳中～後） |
| 15 上泉西遺跡（古代） | 31 板津遺跡（古代・中世） | 47 深原打越遺跡（古代） |
| 16 索田布尾山古墳（古墳前） | 32 板津横穴群（飛鳥白鳳） | |

第2章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯（第2図）

平成19年12月4日、富山県高岡農地林務事務所（現・高岡農林振興センター）指導課計画班より氷見市教育委員会に対し、氷見市大浦地区および七分一地区にて区画整理事業が計画されていることが知られたため、計画地内の埋蔵文化財包蔵地に関する協議を実施した。

大浦地区については、平成21年度着工を目指しているため、埋蔵文化財の調査をそれ以前に実施しなければならないということであった。計画地内のうち、丘陵縁辺部には周知の埋蔵文化財包蔵地、大浦遺跡・堀田サカイ遺跡が所在しているが、計画地の大部分を占める平野部にはこれまで埋蔵文化財包蔵地の所在は確認されていなかった。だが、大浦は古代の古江郷、中世の耳浦庄の一部と推測され、また、かつての布勢水海の範囲を考えるうえでも重要な地域であるため、平野部を含む計画地内全域であらためて分布調査を実施する必要があると判断した。

協議では、分布調査を平成20年春の田植え前に実施すること、試掘調査は国庫補助事業となるため平成20年度に準備し、平成21年度に調査実施することとした。また、分布調査は市の担当者2名が実施するものとした。その後再度協議したところ、分布調査の予定についてはそのままで、試掘調査は平成20年度に繰り上げて実施することになり、21年度以降の測量・設計に調査結果を反映させ、埋蔵文化財の保護を図ることになった。

なお、七分一地区の区画整理事業の実施については当初平成22年度の着工が予定されていたが、事業実施に向けてさらに検討を続けることになったため、現段階において埋蔵文化財包蔵地の分布調査・試掘調査の実施は未定である。

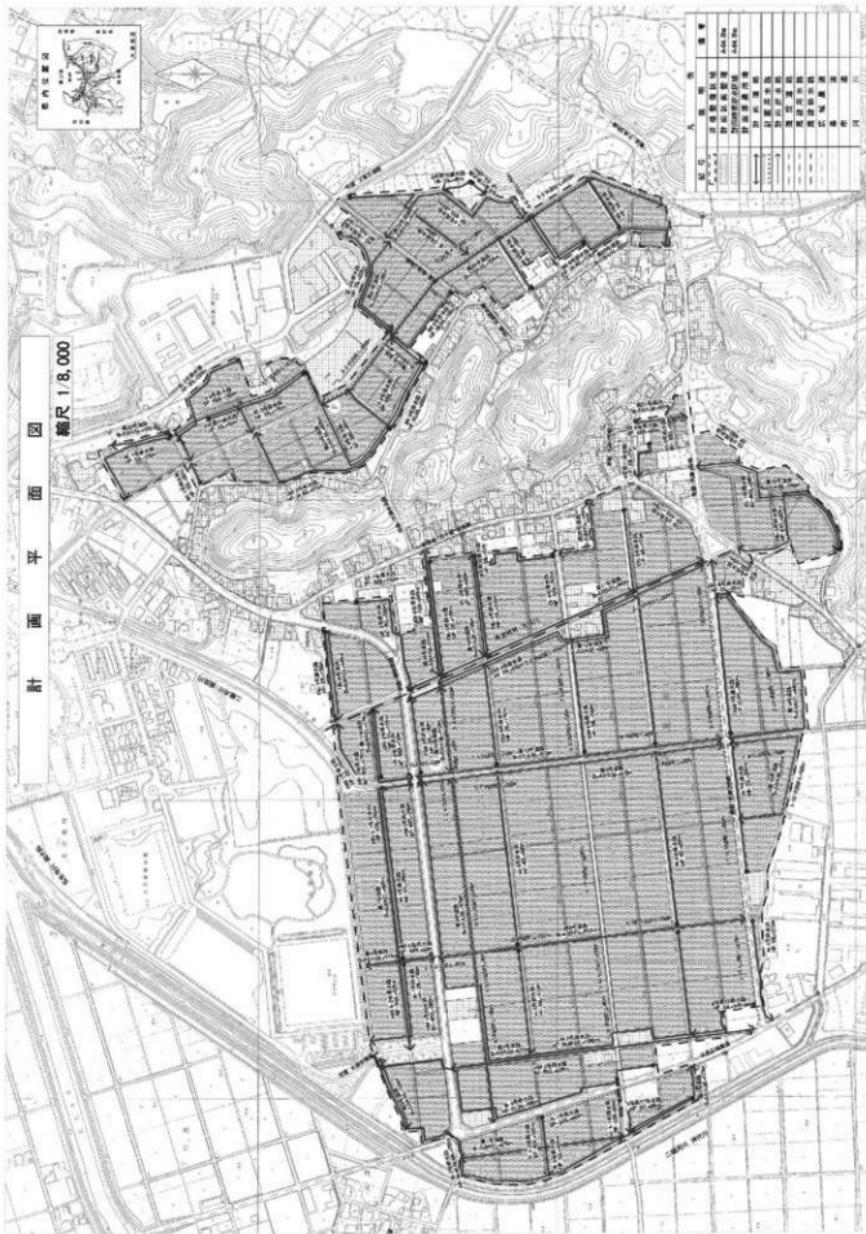
分布調査は、平成20年3月11日から4月3日まで、実働10日間で実施した。対象面積は約70haである。調査の結果、大浦遺跡と堀田サカイ遺跡では遺跡の範囲内を中心に遺物の散布を確認した。また、調査対象地の広い範囲で、まばらではあるが遺物の散布を確認することができた。採集した遺物は摩滅したものが多かったが、総数は古代から中世を中心に100点を超えた。また地元の方からの聞き取りで、過去の掘削で舟の櫂が出土したことや、丘陵部に残る城館跡と十三塚の伝承についての情報を得た。この分布調査の結果を受け、試掘調査では周知の2遺跡のほか、遺物の散布が集中する地点も埋蔵文化財所在推定地として対象とすることになった。

第2節 調査の経過

平成20年度に入り、稲刈り後の試掘調査実施のための準備を進めた。10月3日には、大浦地区的役員を対象とした説明会を実施し、試掘調査に対する理解を求めた。また、海津・川尻・窪等、大浦以外で耕作者が所在する地区に対する役員説明会を10月14日に実施した。これら役員説明会では、大浦地区的水田は土が柔らかい場所が多いため、調査には細心の注意を払って欲しいこと、暗渠排水のパイプに留意することなどの要望を得た。個別の地権者に対しては、地元役員会の後、地権者全員が集められた事業計画の説明会にて試掘調査について周知した。

試掘調査は、平成20年11月4日から12月3日まで、実働14日間で実施した。調査面積は約561m²である。調査では、堀田サカイ遺跡の範囲拡大を確認したほか、新規の遺跡として大浦クランマチ遺跡・大浦ウマダ遺跡の存在を確認した。なお大浦遺跡では、調査対象地内に遺構・遺物の広がりは確認できなかつた。

整理作業は、平成20年12月から開始し、遺物の洗浄・トレース・実測等、順次実施していく。



第2図 農業生産法人等育成緊急整備事業（大浦地区）計画平面図

第3章 調査の成果

第1節 分布調査の成果

平成20年3月から4月に実施した大浦地区の分布調査では、周知の大浦遺跡・堀田サカイ遺跡で、遺跡の範囲内を中心に遺物の散布を確認した。採集した遺物は、大浦遺跡で時期不明土器・瓦質土器・近世唐津等、堀田サカイ遺跡で古代須恵器・時期不明土器等である。

遺跡外を対象とした分布調査では、ややまばらではあるが広範囲で遺物の散布を確認することができた。東地区では、工場地帯として削平された丘陵の縁辺部を中心に中世土器等、土器破片を採集した。西地区では広い範囲で古代須恵器・古代土師器・中世珠洲焼・中世土師器・近世磁器を採集した。摩滅した土器が多いことや、調査区全体に遺物が散在している状況から、神代川・堀田川などの河川の氾濫により広範囲に遺物が散らばった可能性も想定された。遺物の散布がやや希薄だったため、この時点で新たな遺跡として確定せず、試掘調査の結果を待つこととした。

なお分布調査にあたって、地元の方より水田で過去に掘削が行われた際に舟の櫂が出土したという話や、丘陵上にある城館伝承地と塚についての話をうかがうことができた。

伝承によると、大浦の雲閣寺背後の丘陵にはかつて「タチの城」と呼ばれる城があり、現在は堀の跡だけが残る、という。また同じ丘陵に13基の塚があり、あるときお告げによって発掘したが、1基だけは掘らずに残してある、という。これはいわゆる十三塚伝承に通ずるものと考えられる。

この情報に基づき、平成20年3月と6月、計4回にわたり丘陵部一帯の踏査を実施したところ、丘陵南側で6基の古墳を確認した。古墳は、丘陵最高所に位置する1号墳から南側の6号墳まで、尾根沿いに一列に並ぶ。5号墳は前方後方墳ないし前方後円墳、5号墳以外の5基は方墳とみられる。十三塚伝承のもととなったのはこれらの古墳群と推測されるが、盗掘坑の可能性のある窪みがあるのは4号墳のみである。

1号墳の北側には複数の平坦面が連なり、遠景寺背後の墓地に至る。植林などによって改変されている可能性もあるが、これらの平坦面が「タチの城」の伝承と関連するものと推測される。ただし防衛造構等は確認できず、また麓から登ってくる参道状の登り道が存在することから、寺院跡等である可能性も想定される。また、同じ丘陵の北側、日宮神社の背後に堀切があるとの情報も得たため、踏査を行ったが、堀切状の造構は存在するものの周辺に城郭造構とみられる造構は存在せず、堀切状造構も道路の可能性が高いと判断した。

古墳群および城館伝承地が所在する丘陵の小字「高山」より、遺跡名は大浦高山古墳群とし、包蔵地の範囲には、古墳群北側の城館伝承地を含めた。日宮神社背後の堀切状造構は包蔵地の範囲外とした。大浦高山古墳群については、平成20年7月に刊行した『氷見市遺跡地図【第3版】【改訂版】』にて周知を図った（氷見市教委2008）。

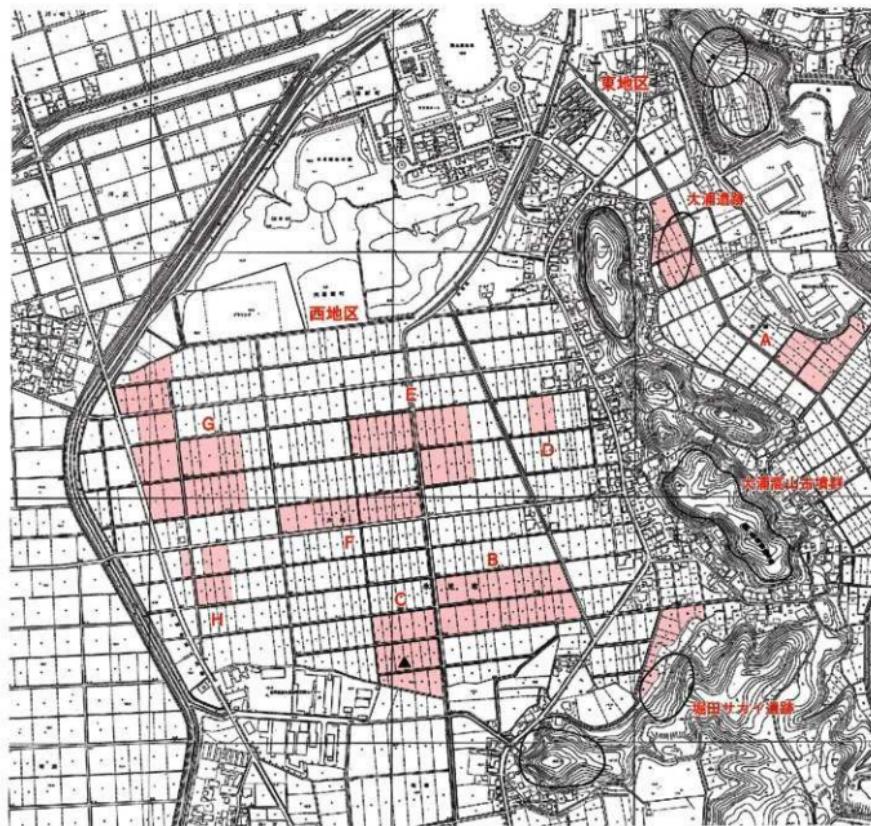
さて、櫂の出土については大浦地区自治振興委員の柳銑次氏も記憶しておられた。柳氏によると、櫂は湖南小学校に保管されているとのことだったため、湖南小学校に確認したが、現在では残念ながら所在不明とのことであった。

これら分布調査の成果を考慮し、試掘調査対象地の決定を行った。周知の2遺跡については、遺跡内の事業計画地全てを対象とし、周辺も含めた広い範囲で試掘調査を実施することとした。遺跡範囲外については古代・中世等の遺物が比較的まとまって採集された地点と、櫂が出土したと伝えられる地点を対象とし、東地区では大浦遺跡南東側の工場縁辺部の微高地、西地区では平野部7か所を対象として試掘調査を実施することになった。

第2節 試掘調査の方法（第3図）

試掘調査では、機械力および人力によって試掘トレンチ・試掘坑を計277基設定し、調査を行った。当初、重機（バックホー）を中心とし補助的に作業員による人力を併用する予定であったが、重機の進入路がない、耕作土表面のぬかるみが激しいなど、重機が進入できない水田が多かったため、結果的には人力のみによって掘削した地点が増加することとなった。また地元役員説明会での要望もあり、すでに田起しきされている場所については調査対象から除外せざるを得なかった。

掘削は、基本的に地表面の確認を主眼とし、土層および遺構の検出状況の記録を行った。湿地帯の痕跡等では、できる限り下層まで掘削し、層位の確認を行った。遺構ないし遺物の包含が確認された地点では、周囲に試掘トレンチ・試掘坑を追加し、遺跡範囲の確定に努めた。



第3図 調査区位置図 ($S=1/10,000$) ▲は櫛出土伝承地

第3節 試掘調査の成果

(1) 大浦遺跡

調査対象地

大浦遺跡は、現在の十二町潟の南方、標高1.5~2.0mの水田に立地する。遺跡は東西の小丘陵が細長く伸びた間に挟まれた幅200mの谷入口近くに立地している。かつて弥生時代の扁平片刃石斧1点が地元の人により採取され、神代小学校に保管されていた。だが、神代小学校が湖南小学校へ統合されるころには石斧はすでになくなっていた、という（氷見市2002）。なお『富山県の歴史と文化』には、弥生時代の石斧の例として「氷見市大浦出土」とされる2点の船形石斧の写真が掲載されている（富山県史編纂委員会編1958）。これらの石斧について詳細は不明だが、同書掲載の遺跡地図「原始時代の郷土」には、「弥生式文化遺跡」として大浦の地名が挙がっており、大浦遺跡出土品である可能性がある。

平成5年度の氷見市教育委員会による分布調査では中世珠洲焼・近世唐津・近世伊万里など4点が採集されており（氷見市教委・富山大学考古学研究室1994）、今回の事業に先立つ分布調査でも中近世の遺物が採集された。

調査の状況（第4図・図版4）

トレンチ・試掘坑を14基設定して調査を行った。調査対象地は湿地帯の痕跡と見られる非常にやわらかいシルト層（Ⅲ～V層）が堆積しており、遺構は確認できなかった。シルト層は、東側の谷中央部がより厚く、丘陵側はやや薄い。遺物は古代・中世・近世のもの9点が出土したが、そのほとんどは湿地堆積の上層（Ⅲ層）からの出土である。遺跡の主体は今回調査対象としていない丘陵縁辺部と考えられる。

大浦遺跡については遺構がなく、遺物も少ないため、保護措置は不要と判断した。

I層	耕作土	8~26cm	にぶい黄褐色土
II層	整地土	10~45cm	褐灰色砂質土・褐灰色シルト（砂・石含む）
III層	湿地	8~30cm	灰黄褐色シルト質土
IV層	湿地	15~185cm	黒褐色シルト質土（腐食木片・腐食植物遺体含む）
V層	湿地	1m以上	黒褐色シルト・褐灰色シルト（腐食木片多く含む）

第1表 大浦遺跡 基本層序



第4図 大浦遺跡試掘調査概要図 (S=1/5,000)

(2) 堀田サカイ遺跡

調査対象地

堀田サカイ遺跡は、二上山塊から北側に派生する丘陵の北側斜面から裾にかけて、標高4~30mの地点に立地し、現況は水田・畑地・墓地である（水見市2002）。平成5年度の水見市教育委員会による分布調査で発見された。その際、弥生土器1点、古代須恵器1点、土師器1点、近世越中瀬戸2点、近世伊万里3点、近世陶器1点、近世磁器1点が採集されており、古代および中世末から近世の遺跡と考えられている（水見市教委・富山大学考古学研究室1994）。今回の事業に先立つ分布調査では、古代の遺物のほか時期不明の土器細片が採集された。

調査の状況（第5図・図版4）

トレンチを7基設定して調査を実施した結果、地表面より30~50cm程度の深さで遺構が検出された。また、遺物は古代・中世を中心として52点が出土した。地山直上まで擾乱を受けているようで、II層中にはビニール片なども混じるが、一部に遺物包含層と見られる黒褐色砂質土層（III層）が残っている。遺構は地山（IV層）上面で検出される。確認された遺構はピットおよび土坑状の落ち込みである。落ち込みからは土器片が5点出土したが、摩滅のため年代は不明である。また、そのほかの遺物として、古代・中世・近世のものが出土している。遺構・遺物の検出状況から、遺跡が北側に広がることが確認された。拡大した遺跡の範囲は、南北約210m、東西約120mである。

堀田サカイ遺跡では、今回の調査で拡大した部分も含めた全域が保護措置の対象となるものと判断した。

I層	耕作土	10~20cm	にぶい黄褐色砂質土
II層	擾乱層	20~35cm	褐灰色砂質土
III層	遺物包含層	0~5cm	黒褐色砂質土
IV層	遺構面・地山		褐灰色砂・暗灰黄色シルト質土
	遺構埋土		黒褐色砂質土・黒褐色砂

第2表 堀田サカイ遺跡 基本層序



第5図 堀田サカイ遺跡試掘調査概要図 (S=1/5,000)

(3) 埋蔵文化財所在推定地

調査対象地（第3図）

東地区で1か所、西地区で7か所の合計8か所で調査を実施した。東地区では、大浦遺跡の南東側、大浦工業センターとして開発が進んだ丘陵縁辺部の微高地（A地点）を調査対象とした。現況は水田・畑地で、分布調査では時期不明の土器片が5点採集された。西地区では、古代須恵器・古代土師器・中世珠洲焼・中世土師器等、古代から中世の遺物が比較的まとまって採集された地点を中心にして7か所（B~H地点）を調査対象とした。いずれも水田で、堀田川と大目川に挟まれたB地点、堀田川西岸のC・F地点、大目川東岸で日宮神社の前に位置するD地点、堀田川の東西に広がるE地点、水見広域農道の東側のG・H地点である。そのうちC地点は、櫂が出土したとされる地点を含んでいる。

調査の状況

東地区のA地点では、大浦遺跡同様、湿地帯の痕跡と見られる非常にやわらかいシルト層の堆積を確認し、遺構は確認できなかった。遺物は中世珠洲焼1点と近世陶器1点が出土しているが、砂利を多く含む整地土層からの出土であった。分布調査で採集された遺物も含め、すでに削平された丘陵部などから流入したものとも考えられる。なお、地元の方の話では、もともとこの場所には北東一南西方向の谷があり込んでいたのだそうで、そこを埋め立てて水田としたのだという。これらを考慮し、A地点では保護措置は不要と判断した。

西地区のB・C・F・G・H地点は、大部分でシルト層の厚い堆積を確認した。地点によっては地山と見られる砂層を確認したが、遺構は検出できなかった。遺物はほとんどなく、B地点で古代須恵器を表探したほか、F地点の地山直上から中世珠洲焼が1点出土したのみであった。図版1に示した区画整理前の空中写真に見るとおり、この地域は神代川、堀田川等が蛇行して流れる氾濫原であり、分布調査で採集された遺物も川の流れで寄せられたものが多いのではないかと考えられる。以上の調査成果を考慮し、これら5地点については保護措置不要と判断した。一方、D地点とE地点では、遺構ないし遺物包含層の遺存を確認することができた。

D地点では広い範囲で遺構を検出し、古代・中世・近世の遺物が出土した。そのため当初予定していた範囲に加え、調査対象を周辺に広げて試掘坑を追加し、遺構検出面の確認を行った。その結果、遺構検出面である地山層の広がりを確認した。E地点では、遺構は確認できなかったが、堀田川の西岸で砂層（地山）直上に堆積した遺物包含層から古代を主体とする遺物が出土した。

これら今回新たに遺構ないし遺物包含層を確認した2地点は、いずれも保護措置の対象となると判断した。遺跡名は、「十三地区の地名」（十三地区郷土文化再発見活動実行委員会1993）を参考に、それぞれの地点の通称地名からD地点を大浦クラノマチ遺跡、E地点を大浦ウマダ遺跡とした。

大浦クラノマチ遺跡（第6図・図版5）

日宮神社の西側の水田地帯に広がる遺跡である。試掘調査では土坑・ピット等が検出された。遺構検出面である地山は、褐色～にぶい黄褐色を呈し、地点によってシルト～砂質土～砂が入り混じっている。遺構検出面は、東は現在の集落まで、西は大目川までの南北約75m、東西約185mの範囲に広がる。西端では川跡とみられる落ち込みが検出され、これは大目川の旧河道にあたるものと推測される。遺物は、遺物包含層とした灰黄褐色シルト質土を中心に44点が出土した。古代・中世・近世のものがあり、主体となるのは中世である。遺構に伴う遺物ではなく、遺構の年代は不明である。

大浦クラノマチ遺跡については、今回確認した遺跡の範囲全体が保護措置の対象となると判断した。

I層	耕作土	10~15cm	褐色砂質土
II層	整地土	0~5cm	暗青灰色シルト
III層	遺物包含層	30~70cm	灰黃褐色シルト質土（炭化物含む）
IV層	遺構面・地山		褐色シルト・にぶい黄褐色砂・褐色砂質土
	遺構埋土		黒褐色砂質土（炭化物含む）

第3表 大浦クラノマチ遺跡 基本層序

大浦ウマダ遺跡（第6図・図版5・6）

大浦クラノマチ遺跡のさらに西側、堀田川沿いに立地する遺跡である。試掘結果に基づき、南北約75m、東西約35mを遺跡の範囲とした。遺構は確認していないが、遺跡範囲の北東側に遺物包含層が残存しており、砂層（地山）直上に堆積した黒褐色シルトと暗灰黄色シルトがまだらに混じった層および暗灰黄色砂質土層から古代土師器・古代須恵器等が出土した。また、場所によっては5~30cm程の厚さで炭化物の層が広がっており、層中から古代須恵器等が出土している。遺物は古代を中心に71点が出土しており、平安時代が主体となるとみられる。

大浦ウマダ遺跡についても、遺跡全体が保護措置の対象となると判断した。

I層	耕作土	10~18cm	灰黃褐色砂質土
II層	整地土	10~55cm	褐色砂質土
III層	遺物包含層	0~30cm	黒褐色～暗灰黄色シルト・暗灰黄色砂質土・炭化物層
IV層	地山		黄灰色砂

第4表 大浦ウマダ遺跡 基本層序



第6図 大浦クラノマチ遺跡・大浦ウマダ遺跡試掘調査概要図 (S=1/5,000)

第4節 出土遺物

(1) 大浦遺跡 (第7図・図版7)

調査では、古代須恵器・中世土師器・中世古瀬戸・近世陶磁など9点が出土した。そのうち4点を図示した。

1・2は古代須恵器。1は瓶類の体部破片で、外面下半は剥離が見られるが、上半にはヘラケズリを施す。内面はロクロナデが残る。2は壺の体部破片で、外面に平行叩き目、内面にはかすかに同心円状当て具痕が確認できる。3は非ロクロ成形の中世土師器皿で、口径7.4cm、器高1.65cmを測る。15世紀前半のものか。4は古瀬戸の縁軸小皿。口径9.6cmを測る。口縁端部に灰釉を施し、内面にトチンの跡が残る。古瀬戸後期後半、15世紀代のものと考える。

(2) 堀田サカイ遺跡 (第7図・図版7)

調査では、古代須恵器・中世青磁・中世珠洲焼・近世陶磁・時期不明の土器片など52点が出土した。そのうち15点を図示した。

5~11は古代須恵器である。5・6は杯蓋。5は口径12.6cm、外面に自然釉がかかる。6は外面に回転ヘラケズリを施す。7は杯Aで、口径12.7cm、器高3.5cm、底径9.3cmを測る。焼成は悪く、内外面とも灰黄色を呈する。8は瓶類の体部破片である。9は壺の口縁部で、口径25.8cmを測る。外面に平行叩き痕が残り、その上から内外面ロクロナデを施す。内面端部に自然釉がかかる。10・11は壺の体部破片で、10は外面に平行叩き、内面に同心円状當て具痕、11は外面がカキメと平行叩き、内面に同心円状當て具痕が残る。

12は龍泉窯系の青磁碗である。口径16.3cmを測る。内面に片切り彫りの文様を施す。釉は灰オリーブ色を呈する。12世紀後半のものか。13~17は中世珠洲焼である。13は擂鉢で、口径29.8cmを測る。口縁端部はやや外傾し、鉢目はない。吉岡編年のI~II期のものと考えられる。14~17は壺類の体部破片である。

18~19は越中瀬戸である。18は擂鉢で、内外面に筋釉を施す。鉢目は磨耗が著しく、内面には炭化物が付着する。鉢目は幅1.9cm 8条である。19は壺ないし匣鉢の底部破片で、底外面に回転糸切り痕が残る。底径8cmを測る。内外面に鉄釉を施す。体部の割れ口に炭化物が付着しており、割れた後に被熱したとみられる。

以上、時期を断定できる遺物は少ないが、古代は8世紀代、中世は12世紀後半から13世紀前半を主体とするものと考えられる。

(3) 大浦クラノマチ遺跡 (第8・9図・図版7・8)

調査では、古代須恵器・古代土師器・中世土師器・中世珠洲焼・中世青磁・近世陶磁・土錐など44点が出土した。そのうち26点を図示した。

20は高杯の脚か。外面は摩滅が著しい。中央に穴が貫通しており、上部は棒による穿孔で、やや広がった下部には粘土を絞り込んだ跡が確認できる。

21は古代土師器の椀。底径5.6cmを測る。内外面とも摩滅が著しい。平安時代のものであろう。

22~26は古代須恵器である。22は杯B身の底部で、高台径8.0cmを測る。23は瓶類の肩部で、外面にカキメを施す。24~26は壺の体部破片である。24は外面に平行叩きとカキメ、内面に同心円状當て具痕が残る。25は内外面とも打ち欠いたような痕跡が残る。26は外面に平行叩き、内面に同心円状當て具痕が残る。

27~33は中世土師器皿。いずれも非ロクロ成形である。27は口径8.0cm、器高1.5cmを測る。28は口径10.0cm、器高1.5cmを測る。29は口径11.4cm、器高2.2cmを測る。外面に段を持ち、口縁がやや外反する。30は口径10.4cmを測り、内湾気味に立ち上がる口縁を持つ。31は口径11.0cm、器高1.35cmを測る。32は底部破片である。33は口縁部破片で、外面に段を持つ。これらはおおむね15世紀代のもの

であろう。

34・35は龍泉窯系の青磁碗。34は口縁部破片で、口径12.8cmを測る。外面に錦辺文を施す。釉は明緑灰色を呈する。12世紀末から13世紀前半のものと考える。35は底部破片で、見込みに花文を施す。高台径は5.2cmを測る。釉はオリーブ灰色を呈する。14世紀初めから後半のものか。

36～42は中世珠洲焼である。36は擂鉢で、粗雑な胎土、鉢口から吉岡編年のⅥ期のものと考える。37～42は壺壺類の体部破片である。

43・44は越中瀬戸である。43は内堀皿。口径11.0cm、器高2.5cm、底径4.6cmを測る。口縁内外面に灰釉を施す。前り出し高台で断面は逆三角形を呈する。44は壺。口径6.0cmを測り、内外面に鉄釉を施す。

45は土錘である。椎型で、最大長4.7cm、外径3.8cm、内径2.0cmを測る。

以上のように、古代から近世までの遺物がある。そのうち主体となるのは中世で、12世紀末から15世紀代の時期幅があるものと考えられる。

(4) 大浦ウマダ遺跡（第9・10図・図版8・9）

調査では、古代須恵器・古代土師器・中世珠洲焼・近世陶器・土錘破片など71点が出土した。そのうち33点を図示した。

46～63は古代須恵器である。46・47は杯B蓋。46は径2.3cmのつまみがつく頂部破片。47は口縁部で、口径16.2cmを測る。口縁端部を屈曲させ、端部を小さく引き出す。9世紀前半のものであろう。48～50は杯B身。高台径は、48が7.0cm、49が7.7cm、50が9.8cmを測る。これらは8世紀後半から9世紀前半のものであろう。51は杯類の口縁部破片である。52～57は壺瓶類。52は頸部破片、53は広口瓶等の口頸部破片であろう。54～57は体部破片である。いずれもロクロ成形によるもので、54は外面にヘラケズリを施す。58～63は壺の体部破片である。58は、外面は格子状叩きの上にハケメを施し、内面は同心円状當て具痕が残る。59・60は外面平行叩き、内面同心円状當て具痕が残る。61は外面に非常に粗い平行叩き目を施し、内面には平行當て具ないし同心円状當て具の縁辺を使用したとみられる當て具痕が残る。62は外面が平行叩き、内面は格子状にも見えるがはつきりせず、木目が浮き出た同心円状當て具痕とみられる。63は外面平行叩き、内面同心円状當て具痕で、焼成が悪く灰白色を呈する。

64～75は古代土師器。64～68は碗である。64は底径6.4cmを測る。体部は丸みを持って立ち上がり、底外面に回転糸切り痕とヘラ傷が確認できる。68は底径6.4cmで、底外面に回転糸切り痕が残る。65・66・67の底径は、それぞれ6.0cm、6.2cm、6.0cmを測る。これら土師器碗は、おむね10～11世紀代に属するものであろう。69は杯Aの底部である。底外面に一定方向のナデを施す。70～78は壺である。70・71は口縁部破片。70は外傾し口縁を上に引き上げたもので、胎土に砂礫を多く含む。71は口縁端部を巻き込むものである。72～75は体部破片で、72は外面に平行叩き、内面に同心円状當て具痕、73は外面に平行叩きが残る、74は内面にカキメ、75は外面にカキメが残る。

76～78は中世珠洲焼である。76・77は擂鉢。76は内面にロクロ目が明瞭に残る。吉岡編年でⅠ～Ⅱ期のものと考えられる。77は内面にかすかに鉢口が残るが、磨耗が著しい。焼成は悪く、胎土も粗雑である。吉岡編年Ⅵ期か。78は壺壺類の体部破片である。

以上のように遺物は古代を中心とし、特に平安時代に属すと考えられる土師器碗の出土が目立つ。

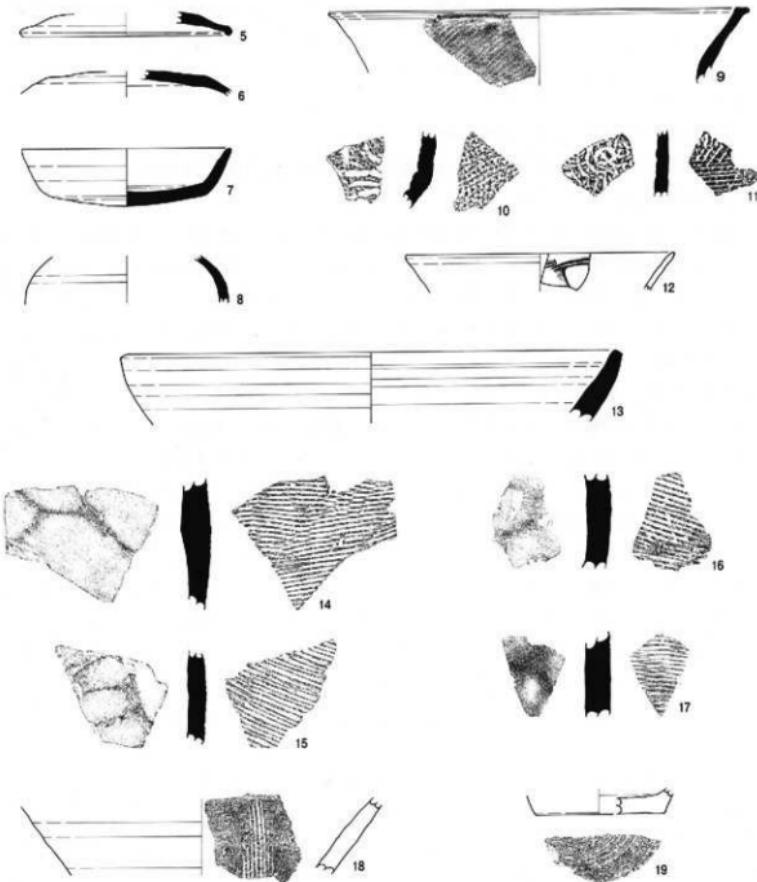
(5) 埋蔵文化財所在推定地（第10図・図版9）

試掘調査の結果、遺跡の範囲外とした地点でも古代須恵器・中世珠洲焼・近世陶器が計4点出土している。そのうち3点を図示した。79はB地点で表探した古代須恵器壺の体部破片である。外面に平行叩き、内面に同心円状當て具痕が残る。80・81は中世珠洲焼である。80はA地点で出土した擂鉢で、吉岡編年Ⅴ期のものとみられる。81はF地点で出土した壺壺類の体部破片である。

大浦遺跡



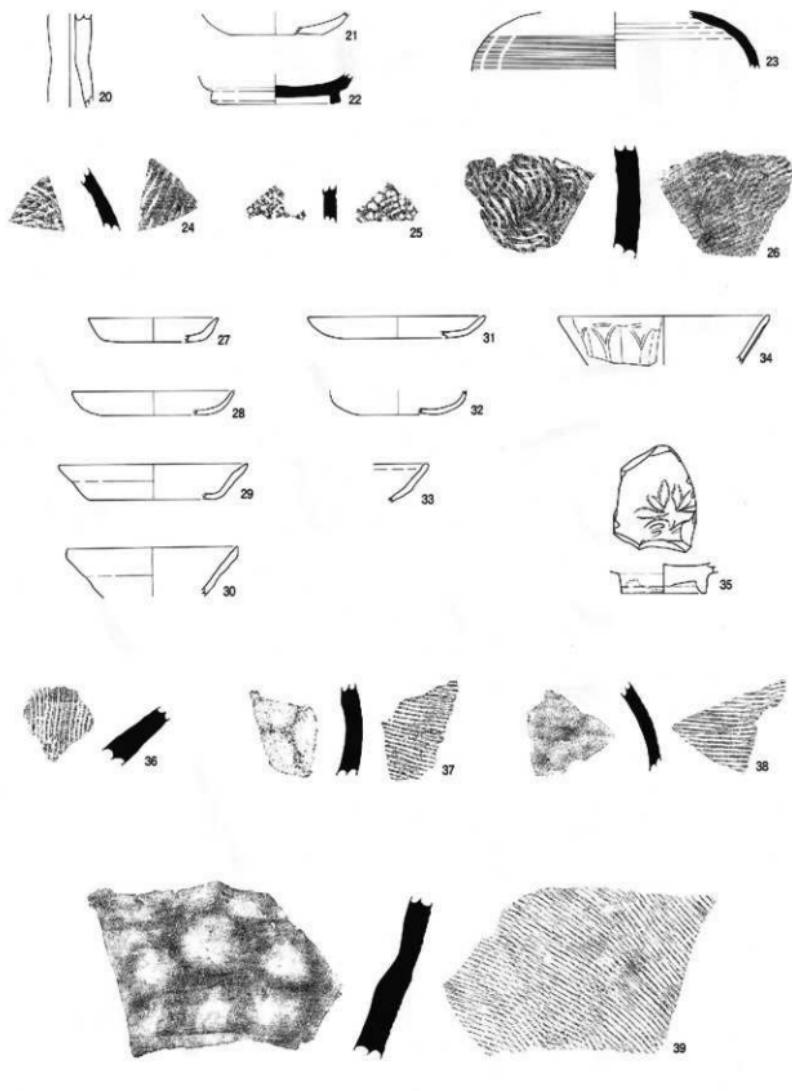
堀田サカイ遺跡



0 15cm

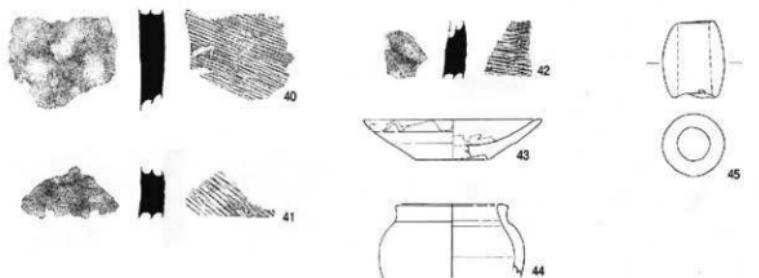
第7図 遺物実測図(1) (S=1/3)

大浦クラノマチ遺跡

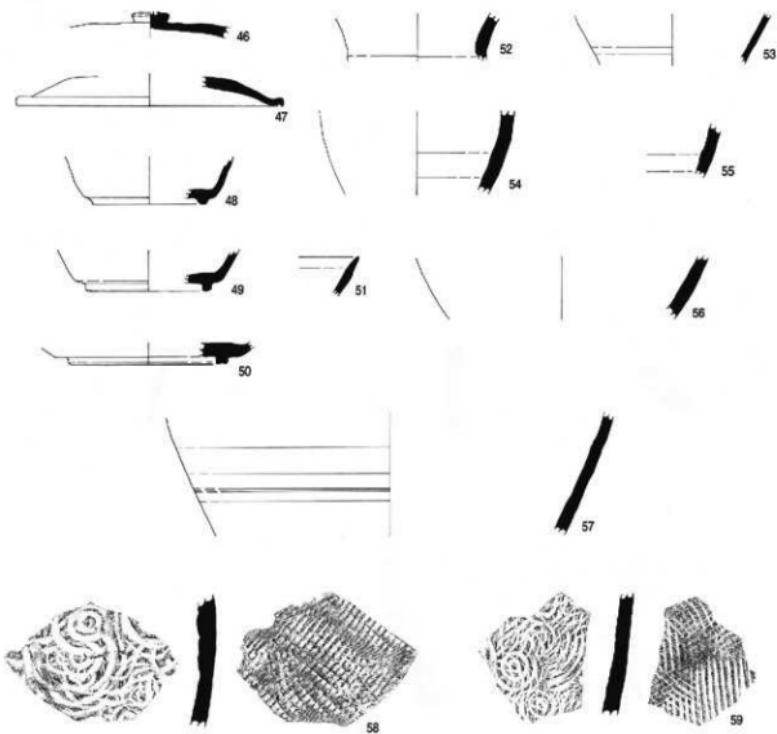


0 15cm

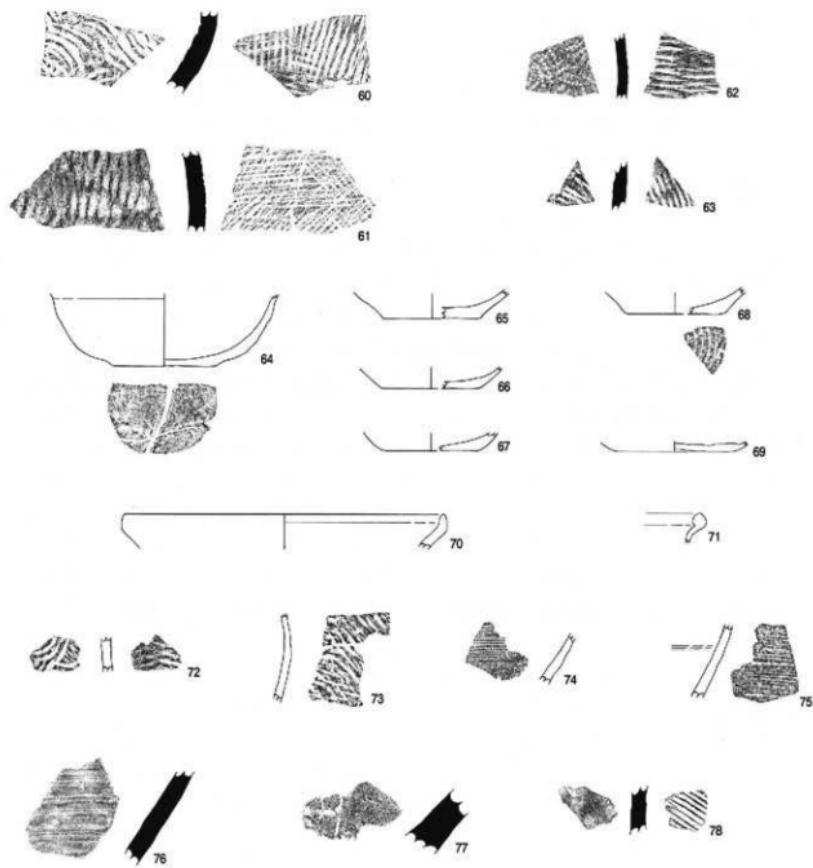
第8図 遺物実測図(2) (S=1/3)



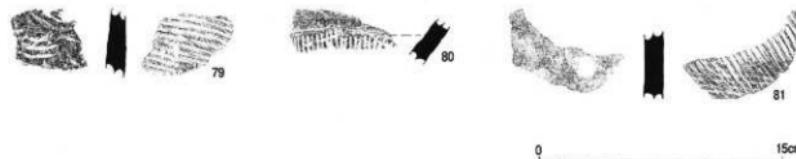
大浦ウマダ遺跡



第9図 遺物実測図(3) (S=1/3)



埋蔵文化財所在推定地



第10図 遺物実測図(4) (S=1/3)

第4章 まとめ

今回、大浦地区を対象に実施した試掘調査の結果は次のとおりである。

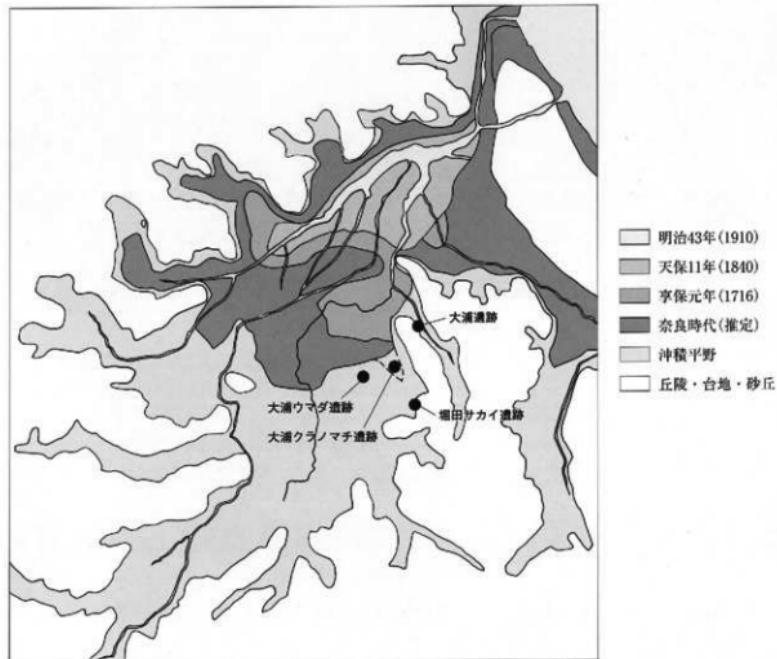
1. 大浦遺跡では、湿地帯の跡とみられる非常にやわらかいシルト層の堆積を確認したが、遺構は確認できなかった。遺物は古代・中世・近世のものが計9点出土したが、そのほとんどは湿地堆積の上層からの出土であった。遺跡の主体となるのは、遺跡の西側、丘陵縁辺部と考えられる。元来、弥生時代の遺跡とされてきた大浦遺跡であるが、その時代の遺物は確認できなかった。大浦遺跡については、保護措置不要と判断した。
2. 堀田サカイ遺跡では、従来の遺跡範囲およびその北側でピットと土坑状の落ち込みが検出された。土坑状の落ち込みからは土器片が5点出土したが、摩滅が著しく年代は不明である。調査区全体では計52点の遺物が出土した。遺物の年代は、古代は8世紀代、中世は12世紀後半から13世紀前半を主体とするものと考えられる。今回の調査結果から、遺跡範囲を北側に拡大した。堀田サカイ遺跡については、この拡大した部分も含めて、保護措置が必要と判断した。対象面積は約9,800m²である。
3. 平成20年3月から4月に実施した分布調査で遺物の散布が確認された東地区1か所、西地区7か所の計8か所を試掘調査の対象とした。その結果、西地区的2か所で新たな遺跡の存在が確認された。遺跡名は、それぞれ大浦クラノマチ遺跡と大浦ウマダ遺跡とした。遺跡が確認されなかった6か所の試掘対象地は保護措置不要と判断した。
4. 大目川の東岸に位置する大浦クラノマチ遺跡では、広い範囲でピット・土坑等が検出された。遺物は、古代から近世までのもの計44点が出土している。遺物の主体となるのは中世だが、12世紀末から15世紀代の時期幅がある。遺構に伴う遺物がなく、遺構の年代を決めるには至らなかった。大浦クラノマチ遺跡については、遺跡全体の保護措置が必要と判断した。対象面積は約14,000m²である。
5. 堀田川の西岸に位置する大浦ウマダ遺跡では、遺構は検出できなかったが、遺物包含層の広がりを確認した。遺物包含層からは平安時代を主体とする遺物が出土しており、遺跡全体では古代から中世の遺物計71点が出土している。大浦ウマダ遺跡についても、遺跡全体の保護措置が必要と判断した。対象面積は約2,600m²である。
6. 大浦地区は、古代は古江郷、中世は耳浦庄の一部を成すと考えられる地域であり、今回の試掘結果はそれら当地域の歴史を解明していくために多くの材料を提供してくれるものであろう。堀田サカイ遺跡が古代～中世、大浦ウマダ遺跡が平安時代、大浦クラノマチ遺跡が中世を主体とすると推測される。試掘調査の限られた成果からは断定できないが、それぞれ古江郷、耳浦庄に関連する可能性がある。今後の資料の蓄積を待ちたい。
7. 第11図に十二町潟（布勢水海）の湖水線の変遷を示した⁽⁴⁾。小海進期にあたる奈良～平安時代には大浦クラノマチ遺跡、大浦ウマダ遺跡の間近に布勢水海が迫っていたと推測される。大浦クラノマチ遺跡、大浦ウマダ遺跡はかつての布勢水海の縁辺部となる地点に立地しており、布勢水海の湖水線の変遷、布勢水海と人びとの関わりを捉えるうえでも興味深い遺跡といえよう。

平成20年度に実施した試掘調査の成果は以上である。次年度以降、区画整理事業の設計が進められていくことになる。計画によっては、今回保護対象であるとした3遺跡について本調査を実施する必要が生じる可能性もある。今回の調査成果に基づき、遺跡の適切な保護に努めていきたい。

(註) 第11図は、「永見市史 自然環境」(永見市1999)に掲載された「十二町潟の岸線の変遷」をトレースのうえ修正を施したものである。もとの図では、大浦クラノマチ遺跡の付近に奈良時代の推定岸線ラインが入り込んでいる。大浦クラノマチ遺跡は中世が主体の遺跡であり、古代にその一帯が水没していてもおかしくはないが、上層からは沼の痕跡を確認することはできなかった。そのため、古代の大浦クラノマチ遺跡の位置は陸地であったと仮定し、修正した。なお、もとの図にある湖水線ラインは破線で表現した。

引用・参考文献

- 児島清文 1962 「永見市地名考」 永見報知新聞社
 財团法人瀬戸市埋蔵文化財センター 1997 「財团法人 瀬戸市埋蔵文化財センター 研究紀要」 第5輯
 財团法人富山県文化振興財團 国埋蔵文化財調査事務所 1996 「梅原湖摩堂遺跡発掘調査報告(遺物編) 東海北陸自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告Ⅱ 富山県文化振興財團埋蔵文化財発掘調査報告第7集」
 財团法人富山県文化振興財團 国埋蔵文化財調査事務所 1998 「五社遺跡発掘調査報告 一能越自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告Ⅰ」
 富山県文化振興財團埋蔵文化財発掘調査報告第9集
 十三地区郷土文化再発見活動実行委員会 1994 「十三地区的地名」 永見市十三公民館
 富山県史編纂委員会編 1958 「富山県の歴史と文化」 富山県 青林書院
 水見市 1998 「永見市史」 3 資料編1 古代・中世・近世(1)
 水見市 1999 「永見市史」 9 資料編7 自然環境
 水見市 2000 「永見市史」 6 資料編4 民俗、神社・寺院
 水見市 2002 「永見市史」 7 資料編5 考古
 水見市 2006 「永見市史」 1 通史編1 古代・中世・近世
 水見市教育委員会 2008 「永見市叢跡地図 [第3版]【改訂版】」 永見市埋蔵文化財調査報告第51号
 水見市教育委員会・富山大学考古学研究室 1994 「永見市埋蔵文化財分布調査報告 I 1993年度」 永見市埋蔵文化財調査報告第16号
 水見市立博物館 2005 「特別展 水辺の人びと－奈勢水辺の歴史をさぐる－」
 吉岡康暢 1994 「中世須恵器の研究」 吉川弘文館



第11図 十二町潟湖水線変遷図



図版 1 遺跡周辺空中写真 昭和22年（1947）米軍撮影 国土地理院



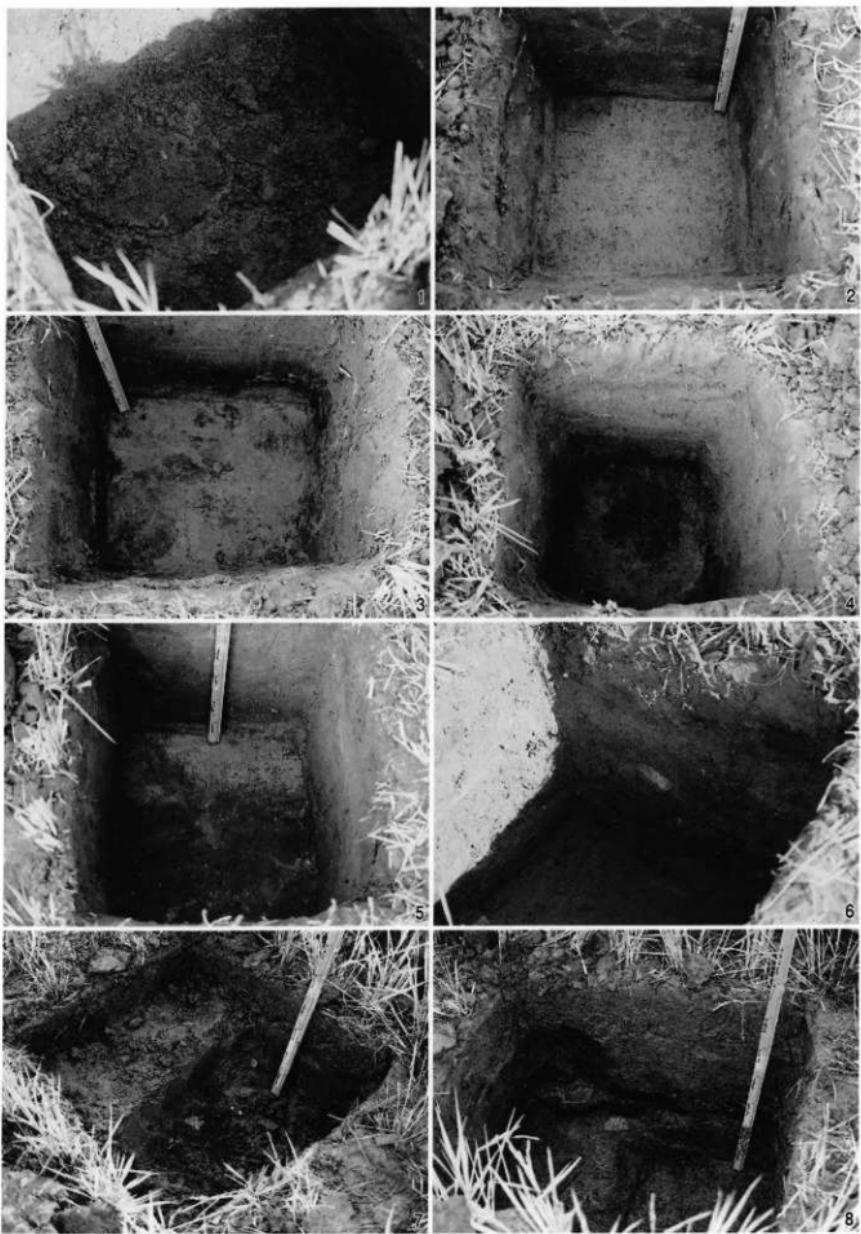
図版2 遺跡周辺空中写真 昭和38年（1963）撮影 国土地理院



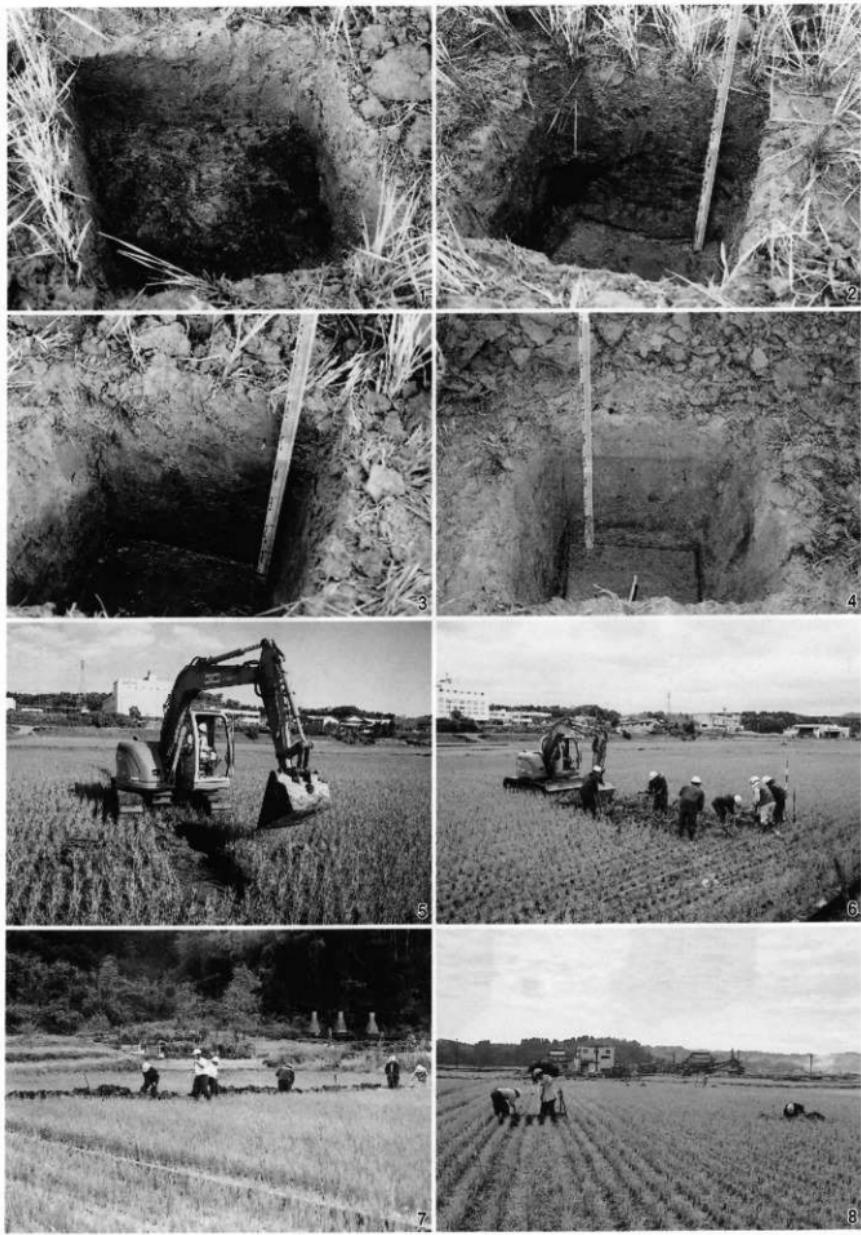
図版3 1. 東地区遠景 (北から) 2. 西地区遠景 (北から)



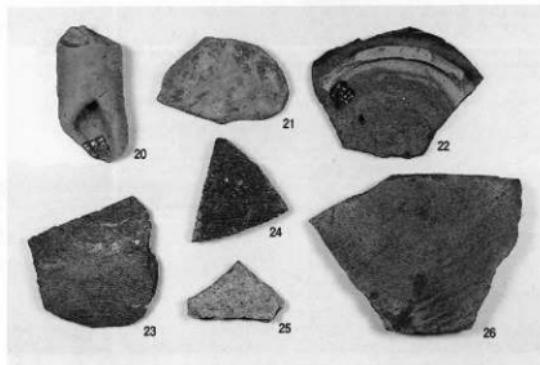
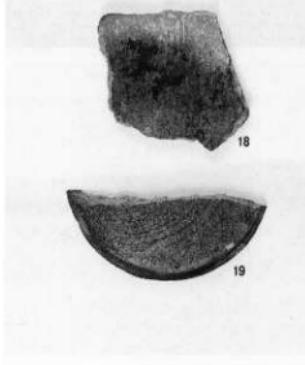
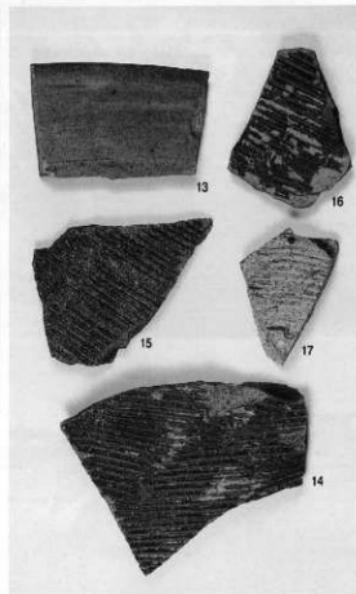
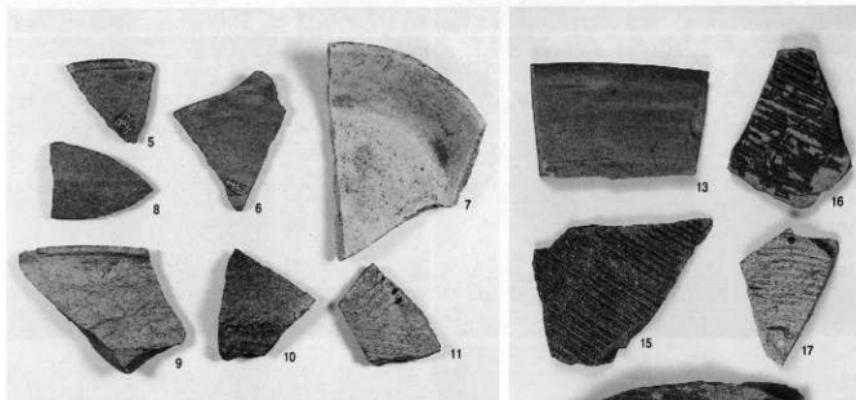
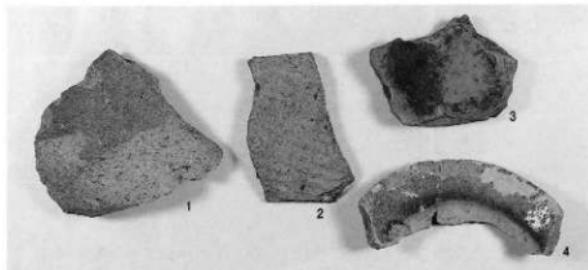
図版4 1. 大浦遺跡トレンチ掘削状況 2~4. 大浦遺跡土層断面
5・6. 堀田サカイ遺跡トレンチ掘削状況 7・8. 堀田サカイ遺跡遺構検出状況



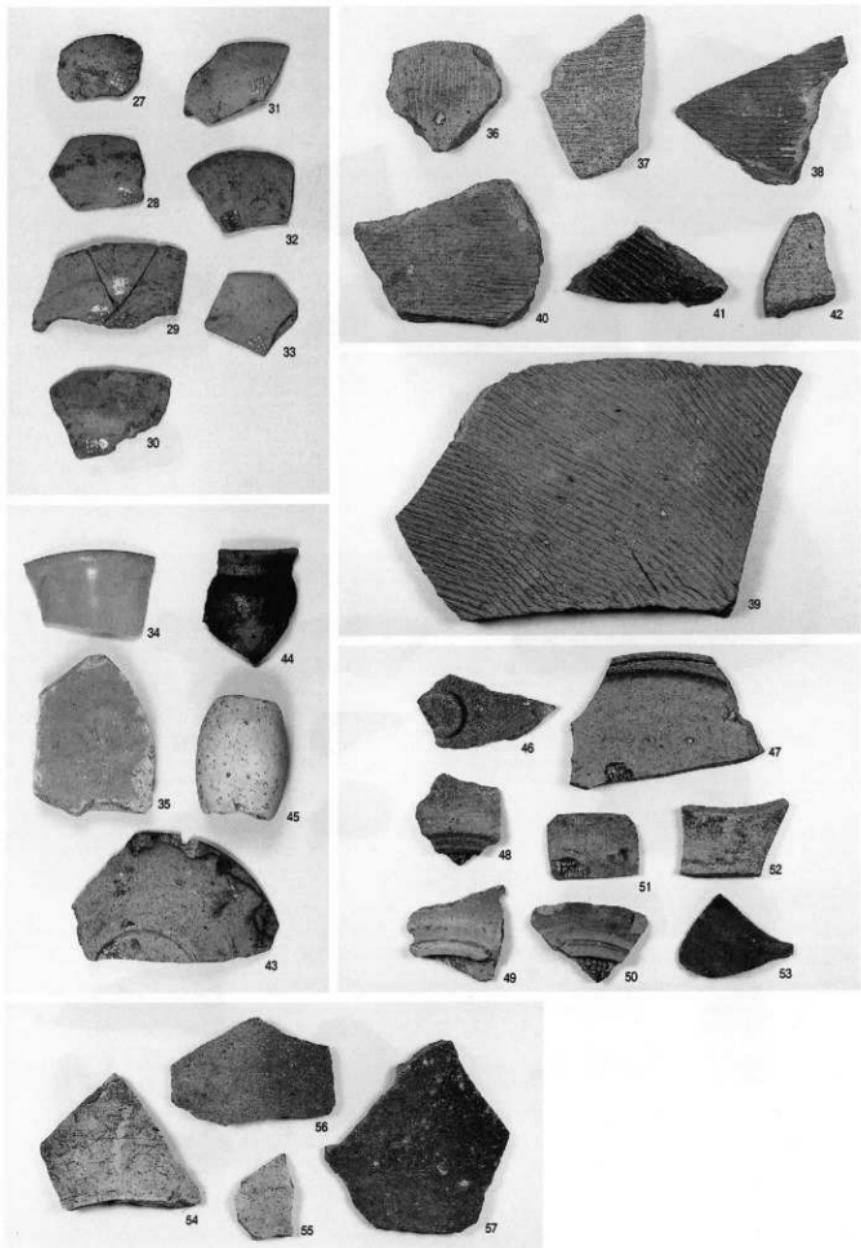
図版5 1~5. 大浦クラノマチ遺跡遺構検出状況 6. 大浦クラノマチ遺跡遺物出土状況
7・8. 大浦ウマダ遺跡遺物出土状況



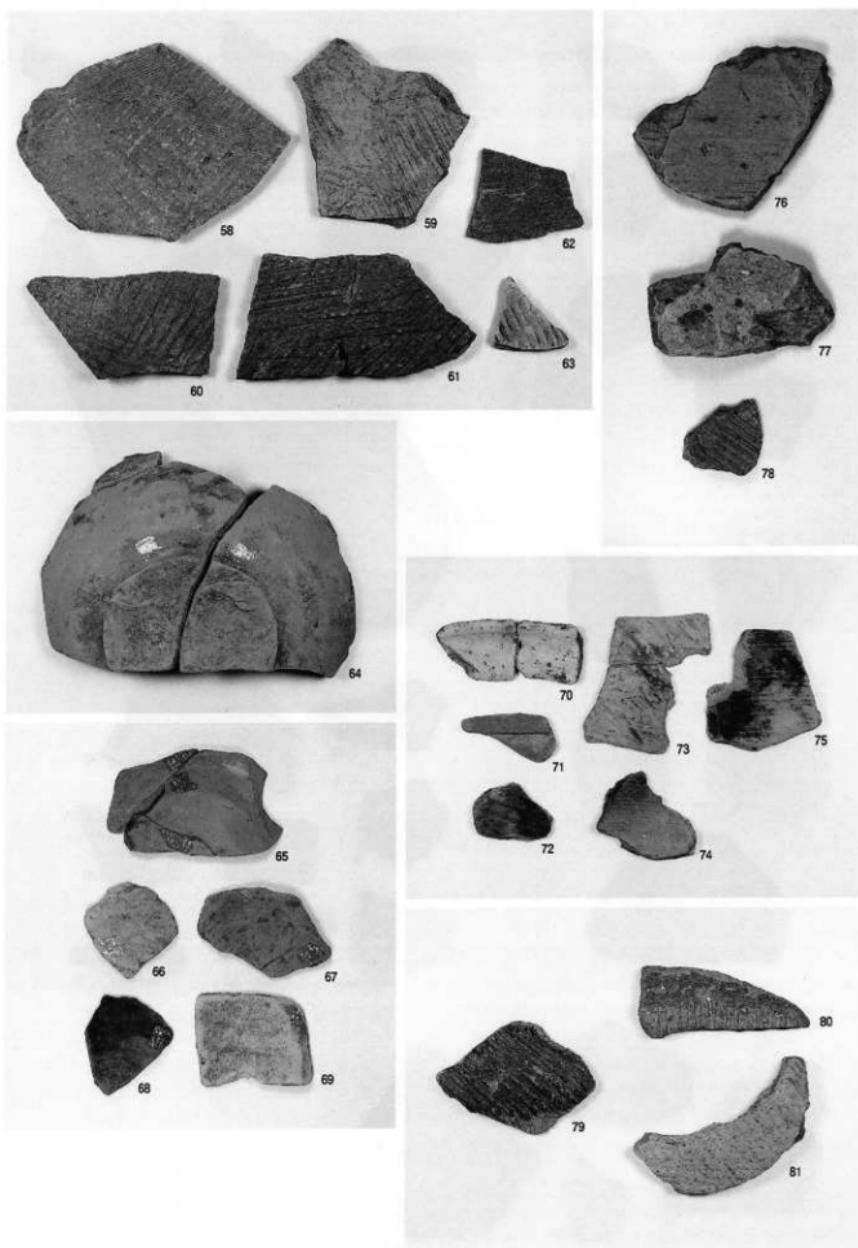
図版6 1. 大浦ウマダ遺跡炭化物層検出状況 2~4. 大浦ウマダ遺跡土層断面
5~8. 作業風景



図版7 遺物写真(1)



図版8 遺物写真(2)



図版9 遺物写真(3)

報告書抄録

ふりがな	おおうちくのうぎょうせいさんほうじんとういくせいきんきゅうせいびじょうにともなうしくつちうさがいよう
書名	大浦地区農業生産法人等育成緊急整備事業に伴う試掘調査概要
副書名	大浦遺跡 堀田サカイ遺跡 大浦クラノマチ遺跡 大浦ウマダ遺跡
卷次	
シリーズ名	水見市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第53冊
編著者名	廣瀬 直樹
編集機関	水見市教育委員会
所在地	〒935-0016 富山県水見市本町4番9号 TEL0766(74)8215
発行年月日	2009年3月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
大浦遺跡	水見市大浦	16205	080	36°49'37"	136°58'44"		126.8 m ²	農業生産 法人等育成緊急整 備事業に 伴う事前 調査
堀田サカイ遺跡	水見市大浦・堀田	16205	244	36°49'11"	136°58'44"	2008.11.04 ~	61.5 m ²	
大浦クラノマチ遺跡	水見市大浦	16205	392	36°49'28"	136°58'36"	2008.12.03	55 m ²	
大浦ウマダ遺跡	水見市大浦	16205	393	36°49'28"	136°58'24"		17 m ²	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
大浦遺跡	散布地	古代 中世 近世	なし	古代須恵器 中世土師器 中世古漸戸			湿地帯の跡を確認。	
堀田サカイ遺跡	散布地	古代 中世 近世	土坑か ピット	古代須恵器 中世珠洲焼 近世越中漸戸			ピットと土坑状の 落ち込みを検出。 古代・中世を主体 とする。	
大浦クラノマチ遺跡	散布地	古代 中世 近世	土坑 ピット	古代須恵器 中世土師器 中世珠洲焼 中世青磁 近世越中漸戸			ピット・土坑等を 検出。遺物は中世 を主体とする。	
大浦ウマダ遺跡	散布地	古代 中世 近世	なし	古代須恵器 古代土師器 中世珠洲焼			平安時代を主体と する遺物包含層を 確認。	
要約	大浦遺跡・堀田サカイ遺跡および分布調査で遺物の散布が確認された地点の試掘調査を実施した。大浦遺跡は、調査対象地の全域が湿地帯の跡であることが確認された。堀田サカイ遺跡ではピット・土坑状の落ち込みが検出され、古代～近世の遺物が出土した。その結果、遺跡の範囲を北側に拡大した。埋蔵文化財所在推定地では大浦クラノマチ遺跡・大浦ウマダ遺跡を新たに確認した。大浦クラノマチ遺跡では中世を主体とする遺物とピット・土坑等を確認した。大浦ウマダ遺跡では平安時代を主体とする遺物包含層を確認した。							

平成21年3月26日印刷
平成21年3月31日発行

水見市埋蔵文化財調査報告第53冊

大浦地区農業生産法人等育成緊急整備事業に伴う試掘調査概要

大浦遺跡 堀田サカイ遺跡 大浦クラノマチ遺跡 大浦ウマダ遺跡

編集・発行 水見市教育委員会
〒935-0016
富山県水見市本町4番9号
☎0766(74)8215
印 刷 能登印刷株式会社

この調査報告書は高精細なハイファイン印刷(FMスクリーン方式)で製作されています。